

## 関西大学と盾塚・鞍塚・珠金塚古墳

著者	藤井 陽輔
雑誌名	阡陵：関西大学博物館彙報
巻	72
ページ	14-15
発行年	2016-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00023829">http://hdl.handle.net/10112/00023829</a>

# 関西大学と盾塚・鞍塚・珠金塚古墳

藤井陽輔

## 1. 盾塚・鞍塚・珠金塚古墳

大阪府藤井寺市・羽曳野市には古市古墳群が所在する。堺市に所在する百舌鳥古墳群と双壁をなす巨大古墳群であり、どちらも古墳時代中期を代表する古墳群といえよう。

昭和30(1955)年、誉田御廟山古墳(伝応神天皇陵)に近い道明寺町において、住宅建設が計画された。工事計画範囲内には3基の古墳が所在し、破壊を待つばかりであったが、幸いなことに末永雅雄先生(当時関西大学文学部教授)の指導のもと事前に調査される運びとなった。現地調査は北野耕平氏(後大阪大学助手、神戸商船大学教授)が担当し、関西大学の学生を中心とする諸氏によって、約半年間の調査がおこなわれた。調査の結果、3基の古墳からは武器・武具を中心に多種多様な副葬品が出土し、後述する特色のある副葬品から「盾塚古墳」、「鞍塚古墳」、「珠金塚古墳」と名付けられた。また、3基の古墳は古市古墳群中の最大の古墳である誉田御廟山古墳から北東150m前後に占地することから、調査当初は誉田御廟山古墳の陪塚として認識されていたようである。

それでは3基の古墳を築造年代順に紹介する。盾塚古墳は古墳時代中期初頭に築造された古墳で、3基の中で最も大きい全長64m(後に73mに改められた)の帆立貝形古墳である。後円部に設けられた粘土槨からは、短甲2領、衝角付冑1鉢をはじめとする多種多様な武器・武具や、筒形銅器、鑷子状鉄器といった当時出土例の少なかった器物が数多く出土した。また、木棺を納めた粘土槨の上には11面もの盾が置かれていた。これが本古墳名の由来である。調査から約1年後の宅地工事の際には前方部にも遺構が存在することが判明した。正式な調査ができず、遺物が回収された程度であるが、立会時の記録から、人体を埋葬せず、器物の埋納に主眼を置いた施設と考えられる。

鞍塚古墳は全長約40mの円墳(後に48mの帆立形古墳に改められる)で、後円部の埋葬施

設からは、武器武具類といった盾塚古墳からの連続性を想起させられる器物のほか、鞍をはじめとする馬具一式や鉄鋌といった朝鮮半島南部からの舶載品とみられる器物が出土した。

珠金塚古墳は一辺25~27mの方墳で、墳頂部に南北2つの埋葬施設が設けられている。先行して設けられたと考えられる南槨は、被葬者2体の埋葬を復元でき、棺の内外で短甲が4領納められていたほか、武器・武具類が多く出土した。北槨からは短甲が1領出土するが、南槨に比べて武器・武具の副葬は少ない。他方で金製空玉や鉄製の針といった、女性的な要素を想起させられる器物が多く出土した。

出土した遺物はさまざまな経緯を経て、関西大学文学部考古学研究室が一括で保管する運びとなり、平成3(1991)年には報告書『盾塚鞍塚 珠金塚古墳』が刊行された。これにより、同古墳は研究者の間で広く周知され、古墳時代中期、特に武器・武具、軍事研究の進展に寄与してきた。

## 2. 近年における研究の動向

平成3年の報告書刊行以降、大阪府教育委員会によって盾塚・鞍塚古墳が所在した周囲の発掘調査がおこなわれ、これらの古墳が当初の規模よりも大きくなることや、造出しとよばれる施設が存在していたことが明らかになった。

また、出土遺物については、いくつかの鉄製品が保存処理・修理を施され、より永年の保管が可能となった。修理に際して明らかになった新事実がさまざまな形で報告され、情報が日々蓄積されている。筆者も珠金塚北槨出土の短甲の保存修理にともなう新知見を報告した<sup>1)</sup>ほか、盾塚古墳出土の頬当について、朝鮮半島からの影響を受けつつも、倭国で製作された武具であることを指摘した<sup>2)</sup>。

### 3. テーマ企画展の開催

関西大学は平成27(2015)年10月24日、31日、11月7日に、ミュージアム講座「関西大学と百舌鳥・古市古墳群」を開催した。本講座と連携するかたちで、10月24日から12月1日の間、博物館第2展示室の一角でテーマ企画展「関西大学と盾塚・鞍塚・珠金塚古墳」を開催し、関西大学文学部考古学研究室が所蔵する資料を展示した。本資料は資料保護の観点から平時は研究室収蔵庫で保管されており、恒常的な展示はされていない。関西大学博物館でまとまった展示をするのは今回が初めての試みであった。

展示スペースやケースの形状といった制約上、展示できる資料や解説パネルの数は限られていた。一方で熟覧に耐えうる特徴的な資料が多く存在している。そこで今回の展示では、シンプルだが整った印象を与え、展示資料を熟覧できる環境を作ることを目標とした。

出土資料はコンテナ150箱を越えるため、各古墳ともに特徴的かつ熟覧に耐えうる資料を6点程度選抜し、窮屈さを与えないように間隔を十分に空けて配置した。本展示に陳列した資料は以下のとおりである。

盾塚古墳…変形六獣鏡1、三角板革綴衝角付冑1、三尾鉄1、頬当1組、石釧1、筒形銅器1

鞍塚古墳…方格規矩鏡1、三角板鉄留衝角付冑1、鉄鋌1、砥石2、鏡板付轡1、後輪1

珠金塚古墳…四獣形鏡1、三角板鉄留衝角付冑1、三角板鉄留短甲1、鹿角装剣1、ガラス玉1組（以上、南槨出土）、画文帯環状乳神獣鏡1、金製空玉6（以上、北槨出土）

各古墳の解説は、概要と副葬品の出土状況を示したパネル以外を徹底的に廃した。また、解説の文字を大きくし、手前の資料の鑑賞を阻害しないように展示ケースの奥に配置した。キャプションは、個々の展示資料の解説を除き、資料名と出土古墳名のみを簡潔に表記することで、展示ケース内のキャプションの占める面積を減らすよう努めた。



珠金塚古墳南槨出土の三角板鉄留短甲

### 4. おわりに

今回展示した珠金塚古墳南槨出土の三角板鉄留短甲は、公益財団法人朝日新聞文化財団の2013年度の文化財保護助成を受け、2015年5月に保存修理が完了したばかりの資料であり、これまで展示に供されたことがなかった。本助成対象の基準には「修復等の事業が完了した後は、広く一般に公開することを原則とします。」とあり、今回の展示で一定の責務を果たすことができたと思う。

また、展示準備中、新たな知見を得た。今後も継続して検討を重ねていきたい。余談だが、近年、中期古墳の出土遺物や古墳そのものの再報告・再検討が急速に進み、従来とは異なる研究見解が示されたものも多い。盾塚・鞍塚・珠金塚古墳もまとまった再報告・再検討が必要な時期にさしかかっているのではないだろうか。

最後になるが、来館者の方々に、かつて古市古墳群に特筆すべき古墳が存在したことをアピールできたと思う。展示をとおして、文化財保護に対する理解を深める一助となったこと、ひいては大阪府が目指す百舌鳥・古市古墳群の早期世界遺産登録にむけての応援になったのなら幸いである。

- 1) 藤井陽輔・米田文孝 2013「珠金塚古墳北槨出土三角板鉄留短甲の保存修理と再検討」『関西大学博物館紀要』第19号 関西大学博物館
- 2) 藤井陽輔 2016「倭国における打延式頬当の消長—盾塚古墳出土頬当の再検討—」『関西大学考古学研究室開設60周年記念考古学論叢』関西大学文学部考古学研究室